2013／冬

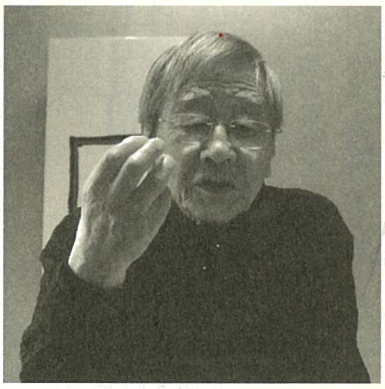
季刊　福井県和紙工業協同組合

和紙だより

■目次

越前和紙への提言　向井 周太郎さん……1頁
レポート　日仏手漉き紙の技術 公開研究会……2頁
レポート　和紙文化講演会……3頁
情報欄　イベント情報、お知らせ……4頁

―越前和紙への提言―



■向井 周太郎（むかい しゅうたろう）
1932年東京生まれ。武蔵野美術大学名誉教授、デザイン思想。
早稲田大学商学部卒業後、西ドイツのウルム造形大学に留学、デザインを専攻。同大学、ハノーバー工科大学インダストリアル・デザイン研究所のフェローを経て、武蔵野美術大学に昭和42年創設の基礎デザイン学科を起案し、新しいタイプの人材の育成とデザイン学の確立に力を注ぐ。文字やテキストを造形に表す形象詩人としても知られる。著書「ふすま-文化のランドスケープ」、「生とデザイン-かたちの詩学I」、「デザインの原像　-かたちの詩学II」「デザイン学-思索のコンステレーション」など多数。

向井周太郎さん（デザイン思想・哲学）「ふすまとは何か？」

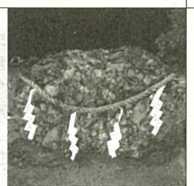
●ふすまを考える契機

私は表具師・経師職人の家に生まれ育ちました。父一太郎は、表具・経師の職業訓練校を設立し、吉田五十八、村野藤吾など和の建築家に重用され、とりわけ襖の領域に力を注いだ表具師です。幼い頃、仕事場をのぞくと、まるで平安時代に迷い込んだようで（笑）、静謐な美の気配に神聖な感動を覚えていました。作業は金箔押しや砂子蒔きから経典の表装や掛軸、額、襖、屏風などすべてに及んでいました。戦後、いくら洋風化が進んだとは言え、襖がこんなに急速に失われていくという現象は、いったいどういうことなのか、考えてみたいと思ったのです。

襖は美術史や建築史では絵画として、工芸史では唐紙などの文様史として語られても、日本の生活文化や日本人の心性の問題として、解き明かしているものがない。また、経師・表具の技術書はあっても、襖とは、屏風とは、衝立とはいったい何なのか、解き明かしたものもない。襖は、千年以上も私達の生活の中で使われてきたのですから、我々の世界観や宇宙観を明らかに作りだしています。それにもかかわらず、日本の生活文化にとってどんなに大事で独自のものなのかが、対象化され、意識化され、共有化されて来なかったのです。この意味での解明が大きく欠落していたので、一層失われ方が早いのではないかと感じています。

●ふすまを読み解く

私の疑問に応える直接的な文献はないので、「言葉は文化である」という言語学の方法論を採り、「やまとことば」を手がかりにしながら、ふすまの文化的風景を再生してみたいと思いました。今ひとつの手がかりは、私が幼い頃から感じてきた襖の原イメージでした。その意味でも、私は「襖」という漢字を開いて、原初の多元的な意味を含むやまとことばの「ふすま」を用いています。



［ふす-伏す］

ふすまは寝る際の夜具である「衾（ふすま）」から出て、衣偏に奥の「襖」と書くようになり、「ふす」は「伏す」から来ています。古代には紙で作った「かみぶすま-紙衾」（紙を外被とし、中に藁わらを入れた夜具）があり、身体を包む、という物から身体を空間的に覆うふすまへと展開されていくわけです。元々身体に非常に密着したものを、我々の生活空間を覆い守る一種の衣類のような空間装置として進化させた。身に纏うものを建具化していったので、単なる物ではなく、呼吸する生命性を持ったものなのです。

［はる-張る］

ふすまには紙を張ります。紙はやはり張力の弓偏の「張る」を使わなくてはなりません。子供の頃の記憶ですが、木格子の上に和紙を幾重にも張り重ねていく作業は、降り注ぐ太陽の恵みである光を一つ一つ丁寧に閉じ込めていく行為に映り、最後に鳥の子紙でピンと表を張った時には、微光がふっくらとした白いハリのある表面から立ち現れてきて、何か新しい世界が顕現してくるような、とても神聖な感じがしていました。「はる」という言葉は、生命力を張るということで、いのちを吹き込むことです。自然の生命の再生を告げる「春」と語源が同根で、草木の芽が「張る」、田畑を切り開いていく時の「は（墾）る」や神を迎えるハレ（晴れ）にも通じます。これだけでは語りつくせませんが、「ふすま」を読み解くに当たっては、他にも「すき」、「さはり」、「しつらい」など多くの言葉があります。

●ふすまと紙

ふすまには骨や縁はありますが、実質は紙以外の何ものでもないですね。ふすまの起源は平安期の寝殿造りに用いた几帳や御帳と呼ばれる骨組みに垂らした布です。当時、布も紙の原料になるようなものを使いました。楮の繊維を取りだした木綿（ゆう）は、神様へ捧げる神聖な物で、それが後に紙垂（しで）や御幣とよばれる紙の造形に変わっていきます。絶えず神様が交流する聖なる場所を作っている紙。その紙で作られたふすまは、神聖な結界を作る道具ですから、私達が「ふすまの敷居を踏んではいけない」と躾けられたのは、まさにそういうことでしょう。興味深いのは、昔のふすまのしつらえ指示書には、全て、白と書いてある。ふすまは白でなければいけなかったのです。白には神聖さ、生成という意味があり、天皇が上

「ふすま」裏表紙
「ふすま」表紙

皇する場や出産の場面でも昔は全体を白で囲ったのです。また、おめでたい所では赤と白、なくなった時には黒と白という具合に、必ず白が媒介している。その白に託された感覚や意味は「神」にも喩え得る紙から来ています。日本人の感性は古来より紙と共にあり、千年以上にわたって消えていません。意識化されていなくとも、紙は日本人の身体や生活世界を守る守護神といっていい。ふすまの神聖さの感覚は、そういう紙を媒介として体現してきたもので、素材としての和紙の白さの清浄性、美しさに負うところが非常に大きいのです。

●ふすま文化の知恵

身体を包む寝具と人と空間を包む建具との関係が連続し、しかも、自然を遮断し、対立するのではなく、紙を介して自然と融合できる生活世界の作り方を知っているというふすま文化には、有限の地球や多様化・複雑化する現代にも貢献できる思想が多く詰まっていると言えます。

越前は昔からふすま紙の一大産地です。最近は職人さんも、国内外に交流等で呼ばれる機会も多いそうですから、紙漉き実演などしながら、「実はふすまにはこういう意味があるのですよ」「紙とはこういうものなのです」と大いに蘊蓄を傾けて頂いて、回りの方と意識を共有していただきたいですね。

レポート

■「日本とフランスにおける手漉き紙の技術―その理解、使用、保存」公開研究会

去る二〇一二年九月六日、美術品などの修復に使われている日仏双方の手漉き紙の性質や紙を取り囲む文化を交流しようと、公開研究会が開催された。この研究プロジェクトは、元々東京在住の川村朋子さん（山領絵画修復工房、紙本修復家）とパリ在住のヴァレンティーヌ・デュバールさん（ルーブル美術館紙本修復室責任者）の個人的なつながりから三年前に構想されたもの。第一回研究会は昨年フランスで、今回の第二回目は東京、昭和女子大学での開催となり、フランスから六名が来日した。版画素描、装丁、表具などの修復家や保存科学者、美術館や文書館員、製紙・販売関係者など八十名余りが参加し、質疑応答も活発に交わされた。

ル・ブラン作下絵、布による裏打ちの準備

ル・ブラン作下絵裏面。
テープ状の和紙による破れの接合

ルーブル美術館紙本部修復室
写真提供：
Valentine Dubard et Béatrice Bert

ル・ブラン（1619-1690）作下絵の和紙と
生麩糊による裏打ち

●用語集の編纂に向けて

近年、海外の文化財の修復分野で和紙の有用性が認識されているが、原料の多様性や製法・特性の正確な知識を持って使用されていることは少ない。英語の解説書はあるが、現場や技術、文化・歴史的背景の知識不足のために、正確な意味が伝わっていないことも多い。一方洋紙はといえば、日本では漠然と手漉き洋紙＝コットン紙と捉えられることが多いが、その製法・特性の詳細はさほど認識されていない。美術館収蔵品の中には、十九世紀後半に一度完全に途絶えた製法による洋紙も多くあり、紙関連の語彙には古語や死語など、自国人でさえもわからない言葉もある。その時代の技術、需要、周辺産業との関連の中で製法は変わり、用いられる語の意味も変容する。

作り手（紙漉き師）、研究者、使い手（修復家）九名で構成される研究会メンバーは、異なる文化圏の紙の特徴や歴史理解を下敷きにした情報交流の必要性を強く感じ、具体的なプロジェクト目標をまず「基礎用語集」の発行に定めた。「用語集」は、修復家あるいは作家、学芸員が、作品を見るとき、紙を使うとき、選ぶときに指標となる基礎資料で、「訳す」ことにこだわらず「実態が伝わるように解説する」ことが目標だ。当公開研究会は、いわばその用語集発行のための研究交流の場と位置づけられるという。

●仏手漉き紙の様相―発表から

プログラムは、フランス側三名、日本側五名が、スライドを交えながら発表。

「ルーブル所蔵紙作品の修復と和紙の使用例」（ヴァレンティーヌ・デュバール）、「和紙の耐久性」（稲葉政満、東京芸大・保存科学）、「手漉き和紙の現状」（有吉正明、高知県立紙産業技術センター）、「紙の歴史の日仏比較」（増田勝彦、昭和女子大・製紙史）、「日本の原料別処理方法」（内藤恒雄、紙漉き師）、「フランスの伝統的紙漉き法」（ジャック・ブレジュー、紙漉き師）、「仏の伝統的ゼラチン・サイジング法」（アリアンヌ・ドゥ・ラ・シャペル、ルーブル美術館紙本作品部）、「手漉き洋紙と和紙の相違点」（大川昭典、元・高知県立紙産業技術センター）等の内容で発表がおこなわれた。

研究会の模様

事前に紙漉き場を訪れた研究会メンバー

デュバールさんは、作品のオリジナリティと処置の可逆性を尊重する現代の修復において、和紙の耐久性、柔軟性、多様性への信頼は厚いという。ルイ十四世時代の画家、シャルル・ル・ブランの作品を軸に、西洋の修復の中での和紙と洋紙の使われ方を紹介した。

ブレジュー氏は、アングレーム郊外の紙漉き場ムーラン・デュ・ヴェルジェで、十五年程前から産業革命以前の紙の研究を始め、二〇〇八年から再現製造している紙漉き師だ。その特徴の一つは、化学洗剤や漂白剤を通していない白色の古麻布（多くは未使用のシーツ等）を原料とすること。布を微細片にし、発酵させるなどした後、自ら復元したスタンパーで繊維を叩解する。漉き方は完全な溜め漉きで、プレス、乾燥の後、ゼラチンによるサイジング（にじみ

止め)を施す。

古い手漉き洋紙を特徴付けるゼラチン・サイジングは季節を選ぶ厄介な工程で、すでに廃れていた手法だ。ルーブルのドゥ・ラ・シャペルさんは、作品分析や古書修復用紙の製作が適切にできるようにと、ブレジュー氏と組んで実験を繰り返しながらゼラチンによるサイジング法の再現に取り組んできた。文献の製法解読でも、現代とは違う意味の用語に出くわすことが多く、用語と実際の作業や実物との照らし合わせは重要と語った。

ジャック・ブレジュー氏の工房、Moulin du Verger母屋外観

ブレジュー氏が再現したスタンパーの白部。紙料が見える

漉いた後の一度目の乾燥。吊るして乾かす

●今後の予定

用語集の体裁は未定だが、川村さんらは、ウェブサイトを開設するなどして、広くオープンソースとして利用できる形態を探りたいと語る。来年度は日仏の機械漉き研究者などを加え、フランスで会合を開く予定。和紙の知的財産の体系化という側面も持つ当研究会の仕事は、グローバルな文化的視点で、日本の紙の地位向上にも寄与しそうだ。

※今回の研究会はフランス大使館、国際交流基金、エルメス財団、在仏日本文化言語研究財団の助成により行われた。

■和紙文化講演会
「和紙に美と技を求めて-加飾紙の世界」

加飾紙の歴史や技法を探ろうと、去る十一月二十五日、和紙文化研究会主催による和紙文化講演会「和紙に美と技を求めて-加飾紙の世界」が、東京・昭和女子大学グリーンホールで開催された。今回で二十回目を迎える記念すべき同講演会は、会創立以来、会員も含め最多の約三百八十人という参加者があった。

●基調講演「加飾紙の歴史とその意味」

長年書道に携わり、特に「かな書道」を探求してきた村上翠亭氏(元筑波大・大東文化大教授)は、我が国の文字・書・紙の関係性の中で、紙がどのように変遷したかを語った。

遣隋使が廃止された平安中期になると、いわゆる「女手」と呼ばれる「かな文字」を美しく書こうという意識が生れる。流し漉きにより、薄くて強い紙が作られるようになると、和製料紙の加飾法も進歩し、和歌や物語が書き込まれた。筆運びをよくする表面をなめらかにする加工は玉(ぎょく)や打紙で行われた。

基調講演　村上翠亭氏

平安後期、平清盛が厳島神社に奉納した「平家納経」は、加飾紙の最高峰と言えるもので、雁皮紙の表裏に金銀の箔や砂子を撒き、金泥・銀泥、岩絵具等で様々な装飾を施し、文字は墨・緑青・金泥を使用している。同時期、流れるような筆運びの個性的な藤原定家の書きぶりは「定家様」として、書風の変化をもたらした。この頃から書をうまく書く家、和歌をうまく唄う家、等の家柄が現れる。

鎌倉～室町時代、武士が台頭し公卿が衰退していく中で、公家の生活を支える伝授技能の一つとして書が重要な役割を果たし、多くの流派が乱立した。しかし、文字は記録的な意味合いが強くなり、うまく書こうという意識は薄れ、書風も次第に形式化していき、唄を書く短冊・色紙・懐紙等も形式化されていった。

会場ホワイエの展示に熱心に見入る参加者

江戸時代、茶道が盛んな地域などで、手習いや鑑賞のために平安期の美しい文字や書の蒐集が流行した。蒐集品の巻物などは、掛け物やアルバムに分解して仕立て、それらは「古筆切」と呼ばれ、「古筆-こひづ」という鑑定士も現れる。

大正期に活躍した日本美術研究家、田中親美は「本願寺三十六人家集」の料紙に美しさに惹かれ、「源氏物語」「平家納経」など多くの古筆を復元・模写した。彼は多くの料紙を制作し、かな書道に取り入れ、和様書道の発展に寄与した立役者と言える。

現在、大きな文字をどっぷりとした筆致で書くことが多い漢字書道に比べ、かな書は美しい加飾紙に書かれたとしても、小さく地味なものになりがちだ。村上氏は「かな書」の立場から、今後は加飾紙に書く方法を教える書道も考えられてよいのでは、と展望を投げかけた。会場ホワイエには、この講演で紹介された「石山切」などの貴重な資料も展示され、参加者は時代時代による書と紙の物語を鑑賞することができた。

●越前美術工芸紙にため息

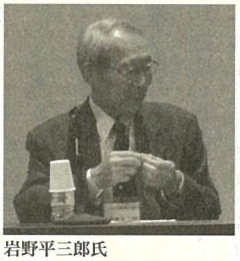
次に、石川満夫氏(越前和紙文化振興事業団理事長)が「江戸時代の越前美術工芸紙」と題して、越前の模様和紙の歴史と多様な技法を発表。

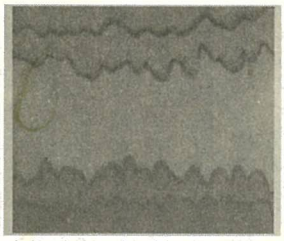
水を活かした模様紙「打雲」の最も古いものは、天喜年間(一〇五三～五八)の書写といわれる「蓬莱切」に見ることができる。薄い雁皮紙を藍染めし、再び叩解したものを、漉いた鳥の子紙の上に雲がたなびくが如く、模様にしてかける。「飛雲」も藍と紫の雁皮紙料を鳥の子に投げかけ、ちぎり雲を思わせる大小の雲形意匠を作る。江戸中期に始まった「水玉」は、鳥の子の地紙に色染めの紙料を漉き掛け、その上にみご(藁の外側の葉や葉鞘を取り除いた茎の部分)などで水滴を振り散らして作る。

他にも、松脂液と顔料で輪を描いて作る「墨流し」、予め材料の繊維を染めて漉く「漉き染め」、独特の美しいしぼを持つ「檀紙」、型紙を使った「漉き出し」「漉き込み」「透かし」や、派生した様々な模様紙も紹介された。石川氏は、越前の多様な加飾紙を生み出した原動力は伝統に甘んじない姿勢だと強調し、「本当にいいものは新しい」と締めくくった。

石川満夫氏

次に、越前三模様を福井県無形文化財として継承している岩野平三郎氏（岩野平三郎製紙所社長）の「打雲」作りや福田忠雄氏の「墨流し」の制作風景が動画で紹介されると、制作過程を初めて見た参加者からは「こうして作るのか！」とため息がもれた。


岩野平三郎氏


両面打雲鳥之子紙 延享年間(1744～1747)

増田勝彦氏（昭和女子大教授）は、最後の総合討議で、水の流れの原理をそのまま利用した「打雲」などは、毎日紙漉きをする職人でこそ思いついた独自の模様なのではないかと述べた。

●実演された「かな料紙」と「箔装飾」

「西本願寺三十六人集」などの精密複製を手掛けた小室久氏（小室かな料紙工房）は、かな料紙の制作工程をスライドで紹介した後、実際に色紙を切り、幾重にも重ね張りし、「継紙」を作る工程を実演し、その模様は壇上のスクリーンに映し出された。

並木秀俊氏（東京芸大助教）は、「平家納経」に用いられている截金（きりかね）、截箔（きりはく）、砂子、野毛、金泥などの技法を紹介した後、自らも作品作りを手掛ける截金技法の実演を行い、解説した。

今回の講演会は、制作工程や技法を実演画像やビデオ画像でスクリーンに映し出すなど、視覚的にも工夫に満ちたものとなった。

和紙ミニコーナー

■映画「ヘソモリ」ハワイ国際映画祭で招待上映

越前を舞台に、和紙職人とその仲間が繰り広げる青春ファンタジー映画「ヘソモリ」が、十月十一日からのハワイ国際映画祭に特別招待作品として上映された。

世界中の映画バイヤーが集まるこの映画祭での前評判は上々で、「ヘソモリ」のチケット（十二ドル）六百席分は完売した。上映日の十月二十日には、ハワイ総領事が訪れる中、プロデューサーの木村氏が上映挨拶と越前和紙の紹介を行い、映画終了後には大きな拍手がおこった。会場内には越前和紙のブースが設けられ、「ヘソモリ」用に作ったタペストリーと英語版の紹介のパネルや越前和紙のパンフレットが並べられ、世界に誇る和紙の里をアピールした。

また、映画祭を機に、同映画は十月のシンガポール航空の機内映画で上映され、ホームページにもハワイ国際映画祭に特別招待の記事が掲載されている他、越前和紙の特集も掲載された。映画祭での上映は越前和紙をグローバルに発信するよい機会となり、関係者も喜んでいる。

なお、「ヘソモリ」は年明けの一月十六日にはポニーキャニオンからDVDでも発売される。

映画祭でのランキングも4と高評価

情報欄

●イベント情報

■平成25年　越前和紙漉き初め式・祈願祭
時：平成25年1月5日（土）午前9:30～
場所：卯立の工芸館（越前市新在家町）

■福井県和紙工業協同組合創立80周年記念式典
時：平成25年1月5日（土）午前11:30～
場所：生涯学習センター今立分館

■絵草紙屋 辻文展
時：平成25年1月5日（土）～3月3日（日）
場所：卯立の工芸館（越前市新在家町）
幕末～明治期の越前出身の版元・
辻岡屋文助をたどる作品展

■越前和紙展-和紙を気軽に使おう Vol.2
時：平成25年1月17日（木）～2月10日（日）
場所：ふくい工芸舎（福井市）
展示、即売あり

■第25回　福井県 越前・若狭の物産と観光展
時：平成25年2月6日（木）～2月12日（火）
場所：丸栄百貨店（名古屋市）

■伝統工芸品展 WAZA2013
時：平成25年2月14日（木）～2月19日（火）
場所：東武百貨店池袋店 8階催事場
展示、即売あり

■平成24年度伝統的工芸品の担い手づくり支援事業（体験事業）
時：平成25年3月22日（金）～24日（日）
場所：卯立の工芸館・組合員工場
東京都港区の子供たちによる襖漉き・小判漉き・墨流し体験

編集後記

地元の主婦達が運営する、越前和紙の里通りに5月にオープンした田舎料理の店「よってこ」が人気だ。11月には、越前の製紙所や和紙に関わる女性達が「越前女紙（めがみ）倶楽部」を結成。早速、勉強会などを開催し、産地の未来を模索し始めた。12月、越前の女性和紙職人が郷里、札幌で紙工房と紙雑貨の店をオープン。女子力強し！がんばれ～！（よ）

季刊・和紙だより 第37号（2013年冬号）　発行日：2013年1月7日　和紙だよりURL→http://washidayori.jimdo.com/
発行人：福井県和紙工業協同組合　山田益弘　〒915-0234　福井県越前市大滝町11-11　TEL: 0778-43-0875　FAX: 0778-43-1142
編集所：Office YOMOSA　〒606-8225　京都市左京区田中門前町90　TEL: 075-712-8834　FAX: 075-702-6223　E-mail: m-yomosa@smail.plala.or.jp
編集人：右衛門佐美佐子・田中裕子
※無断での転写・転載はお断りします。